

環境システム学 III

Environmental Systems III

九州大学グリーンアジア国際リーダー教育センター・助教

渡辺 貴史

< 概要 >

この科目の目的は、現代の西洋哲学の主だった問題を学生に紹介することにある。初日の授業では、哲学とはいかなる学問であるか、哲学を他の諸学（とりわけ科学）と区別するものは何かなど、基礎的ではあるが根源的な哲学的諸問題を考察し導入とした。以降は、ニーチェの『ツァラトストラはかく語りき』のいくつかの章を読解した。その際、特にグリーンアジア学生が特に関心を持つと予想された創造性の意味について掘り下げつつ考察した。なぜなら、創造性の概念はニーチェの哲学で繰り返し論じられる中心的課題であり、また環境保護技術の開発との関連で考察すべき重要な問題だからである。テキストの読解に際しては、学生諸君は前もって指定された章を読んでおくように宿題を課され、授業ではその章に関連した論題について議論を行った。さらに、毎回授業の最後に議論をまとめてプレゼンテーションを行った。授業は毎回このような形で進められた。

< 使用文献 >

Friedrich Nietzsche, *Thus Spake Zarathustra: A Book for All and None*, trans. Thomas Wayne, Algora Publishing New York, 2003.

毎回授業の最後に、次回取り上げる章が示され、学生はこれを読んで準備を整え授業に臨んだ。

< 成績評価 >

出席…………… 40%
授業への積極的な参加、発言、参加するグループの
プレゼンテーションなどへの貢献…………… 30%
小論文（英文 400 単語以上）…………… 30%

< 授業と議論への参加 >

学生は、あらかじめ予習をして準備を整え、科目の進行予定に注意を払いながら与えられた課題に取り組むよう求められた。また、テキストの読解に際しては、グループ内での議論に積極的に参加し、またグループのプレゼンテーションとその後の Q&A に際しても適切な読解に基づいた意見を発表するように促された。

< 結論 >

学生諸君は概ね当科目で取り上げられた論題に興味を抱いているようであった。彼らは回を追う毎にさらに熱心に議論に参加し、ニーチェが提起した哲学的な諸問題を、テキストの厳密な読解を通して理解し批判しようと試みていた。ニーチェが提起した問題とは次のようなものである。なぜ主人の道徳と奴隷の道徳があり、前者が後者に優越するのか。なぜ神は死なねばならなかったのか。なぜ隣人愛は否定されるべきなのか。なぜ積極的なニヒリズムが奨励されるのか。超人とは何を意味するのか。

授業では、ニーチェの哲学についての基礎的な知識を学び、それについて論理的かつ精密に考え議論する方法を習得することを目標とした。その際『ツァラトストラはかく語りき』からいくつかの章を取り出して、それぞれに詳しい読解と検討を加えた。特に、高貴さ、創造性、隣人愛、孤独、友と敵などのテーマを中心に検討し議論を重ねた。

授業を続ける中で、特に学生の興味を引きつける問題がいくつかあった。まず、ニーチェが積極的なニヒリズムの文脈で語る「神の死」の概念は、学生諸君の興味をかき立てた。この概念は、熱心なイスラム教徒の学生には容易に受け入れがたいようであり、彼らはなんとかニーチェの主張を論駁しようと苦労していた。その一方で、日本人学生などは、神の死をニーチェのパスpekティブイズムの観念と関連させることで比較的容易にこの概念を受け入れているようであった。次に、隣人愛についてのニーチェの主張もまた、学生の注意を引いた。なぜなら、ニーチェが隣人愛という現代社会の基礎を構成している道徳性を否定し、その代わりに遠人愛すなわち超人への愛を説いたからである。この課題はすべての学生の興味関心を強く触発し旺盛な議論を引き起こした。幾人かの学生は遠人愛の意義を理解することさえできなかったが、これは社会や家庭において道徳教育を受けてきた誠実な若者にはむしろ当然のことだと思われる。肝心なことは、哲学的な思索にとっては、最も普遍的で基礎的な学問的・社会的通念すら批判の対象となり得ることを知ることであり、このような哲学の態度を貫くためには徹底的な懐疑に耐えうる強壮かつ高潔な精神そして不断の努力が不可欠であること、創造性とはそうした努力に負っていることを理解することである。課題として取り上げた諸章でニーチェが言わんとしたのは、まさにこうしたことであった。

『ツァラトストラはかく語りき』は比喩的な文体で書かれているために、ときに理解が困難となる。しかしグリーンアジアの学生は、この難解な書物の解釈に真剣に取り組み、様々な解釈を提起しては議論を重ね、そうやってニーチェの意図を汲み取ろうと努力を続けた。またニーチェが突きつける難問を自分自身の問題として受け止めようとしていた。提起された課題を自分の問題として受け止め考察を進める学習態度は、本来の哲学的思考のあり方であろう。この意味で、今回の授業は、哲学とは何かを学ぶ上で学生諸君に十分に役立つのではないかと思われる。

